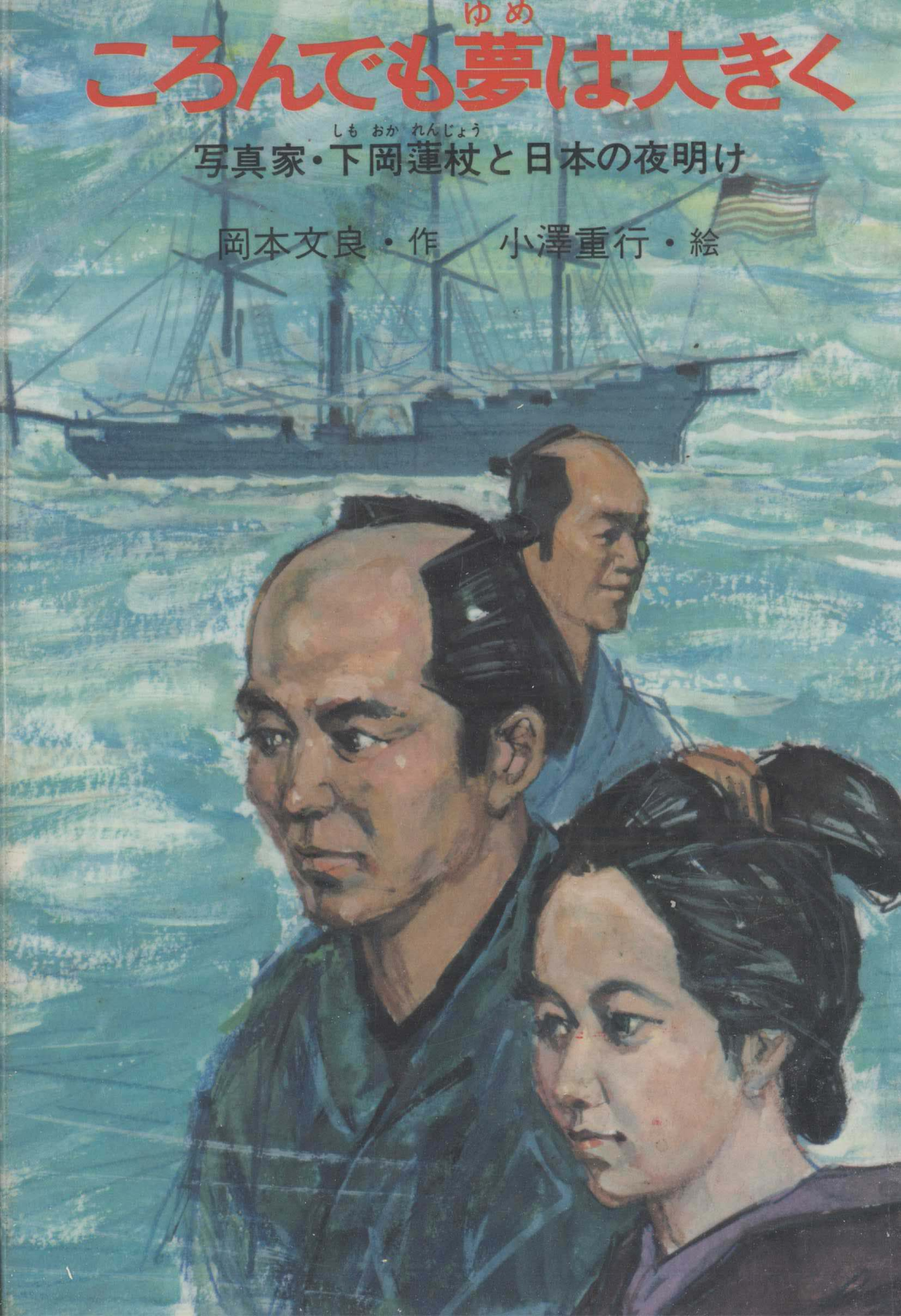
ころんでも夢は大きく

写真家・下岡蓮杖と日本の夜明け

岡本文良・作　小澤重行・絵



ころんでも夢は大きく

下岡蓮杖と日本の夜明け

岡本文良・作
小澤重行・絵

●著者
岡本文良（おかもと・ぶんりょう）
1930年生まれ。茨城県で育つ。東京大学文学部卒業。出版社勤務ののち，文筆業にはいる。著書に『正樹のぼうけん旅行』（あすなろ書房），『遠すぎた京への道（水戸の天狗党）』（さえら書房），『みちのくの聖僧』（ポプラ社），『冠島のオオミズナギドリ』（小峰書店），『シャカと天女と神の国』（あかね書房）『如幻アショーカ』（スタジオ VIC）などがある。
〔現住所〕〒145 東京都大田区東ゐ25の18

●画家
小澤重行（おざわ・しげゆき）
1928年横浜生まれ。山下品藏画伯に師事。個展，グループ展等多数。二科会，創作画人協会に出品。現代水墨画会常任幹事を経て現在無所属。スイス賞展，イタリヤ賞展などに入選，ジュネーブ・プチ・パレ美術館に水墨画作品収蔵。また，文芸雑誌，新聞小説などのさしえの仕事も多く手がけている。
〔現住所〕〒144 東京都大田区仲六郷4の8の14

＜資料提供・横浜市図書館＞

ころんでも夢は大きく　昭和54年12月20日 初版発行

著　者　岡本文良
発行者　山浦常克
発行所　株式会社 あすなろ書房
東京都新宿区弁天町 107 石嶋ビル 〒162
TEL (03) 203-3350 振替・東京 9-63084
第一印刷／ナショナル製本

©, B. Okamoto. 1979 万一落丁・乱丁本がございましたら，ご面倒でも直接小社宛お送り下さい。送料小社負担にてお取りかえ致します。

NDC 913/234 p./22 cm　8393-61823-0060

遠いところに、
久之助の夢をさそう
きれいな希望の雲が見える。
ころんでもころんでも、
その雲めがけて
久之助は歩きつづけた。
つえをつき、かごをせおって……。
消えそうな夢をすてずに……。

ころんでも夢は大きく——もくじ

なにになろうか？

1 砂浜の絵 …… 6
2 わき立つ雲 …… 12
3 たび屋の小僧 …… 18
4 あやしい雲ゆき …… 25
5 足軽 …… 30
6 真の生きがい …… 37
7 絵師の門 …… 43

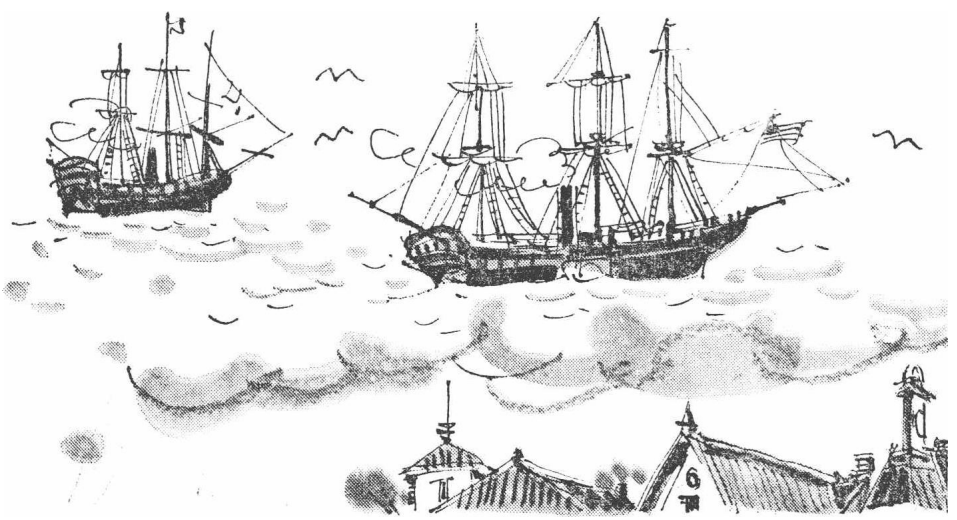
新しい夢にひかれて

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

1 修行 51
2 海のかなたで 59
3 ひろまる魔法の術 66
4 銀板を見る 73
5 まよいと旅立ち 80
6 道づれの若い女 88
7 逆もどり 92
8 ふたたび足軽に 98
9 軍艦の中 105

まよいと希望の年月

1 まちわびる心 114
2 まちわびた船 120
3 横浜村 128

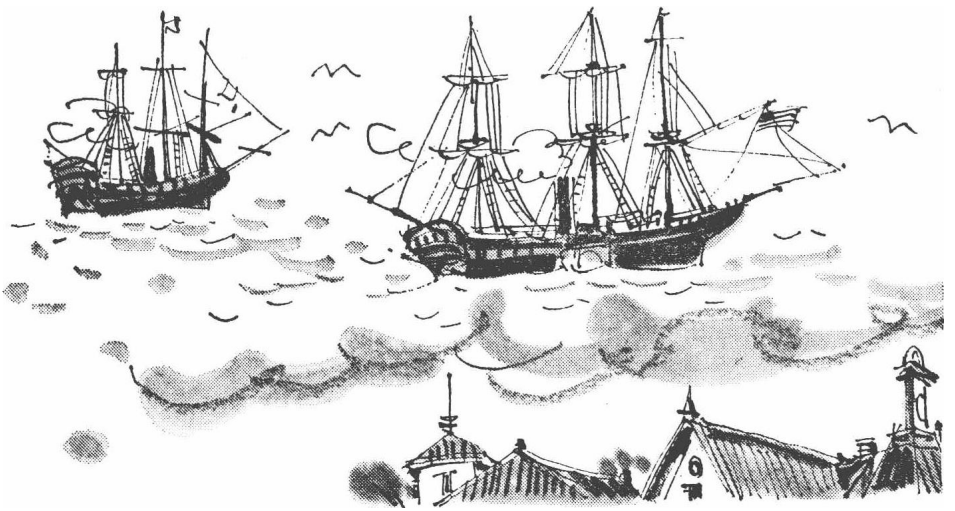


4 談判(だんぱん) 134
5 おくりもの 141
6 祝砲(しゅくほう)のひびく早春 149
7 深夜のできごと 155
8 立ち去る黒船 162

苦しい道のはて

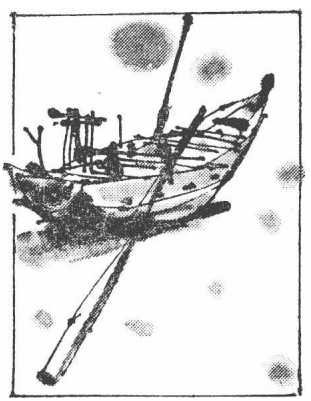
1 山の上の友情 167
2 熱意の声 174
3 あてはずれ 180
4 港のうぶ声 187
5 外人の店 194
6 すくいの女助手 201
7 なおつづく苦しみ 208

8 成功 215
9 ゆくて明るく 220
あとがき 228



なにになろうか？

1　砂浜の絵



（大きくなったら、なにになろうか？）

おそらくたいていの人が、まだ小さいうちに、そういうことを考えるにちがいない。それを考えながら、子どもはみな、もくもくわく雲のように、胸いっぱいにひろがる将来の夢をかき立てていく。

しかし、久之助は、まだそのようなことを考える年にはなっていなかった。将来のことなどはなにも思わずに、ただ絵がすきだからかいているだけであった。

空が青く、海も青かった。港に、たくさんの船がはいっている。

「よいしょっ、こらしょっ。」

ふんどし一つの人夫たちが、いそがしく、重そうな荷を積んだりおろしたりしていた。

子どもたちは、近くの白い砂浜でたのしそうに遊んでいる。久之助が棒きれで砂の上に絵をかくたびに、子どもたちはびっくりした目でそれをながめた。

「久之助は、絵がうまいなあ。」

「久之助、こんどは馬の絵をかいてくれよ。」

久之助がまた太い棒きれを両手ににぎって、砂浜の上をちょこちょこと動きまわる。たちまち、ほんものと同じ大きさで勢いのいい馬の絵ができあがる。

近くの道を、馬に乗った御用所の役人がぱっかぱっかと通った。もちろん、二本の刀を腰にさしたさむらいである。

子どもたちは、久之助のかいた馬の絵の上にまたがると、自分たちがそのさむらいになったつもりで、ぱっかぱっかと声を立てた。やがて遊びあきると、子どもたちは家に帰った。潮が満ちてきて、うちよせる高い波が久之助のかいた絵を洗い流した。

久之助の家は、町の中ほどにある。

久之助は、三番めの男の子である。姉や妹もいる。兄弟が多いので、家ではそれほどかまってもらえなかった。

はなれたところに、久之助の家と親しくしている善助という漁師が住んでいた。善助とおか

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

みさんとのあいだには、子どもがなかった。そのためふたりは、久之助をわが子のようにかわいがっていた。久之助は、それが子ども心にうれしかった。

久之助が六歳になったとき、善助のおかみさんがじょう談のようにわらった。

「どう？　久之助。おまえ、ほんとにわたしたちの子どもになってみない？」

久之助は、利口そうな目をくりくりさせて考えた。どうやら善助たちならば、家よりかわいがってくれそうな気がする。

「うん、なってもいいよ。」

はずかしそうに、わらって答えた。

「えっ、ほんとう？　ほんとうかい？」

おかみさんの顔が、うれしそうにまっかにふくらんだ。

「うん、ほんとうだよ。」

善助とおかみさんは、久之助を養子にくれと、正式に久之助の家に申しこんだ。

父も母も、久之助を手ばなす気はなかった。しかし久之助が、どうしても行くといって、だだをこねた。

「おかしな子だよ、この子は。」

母が困った顔をした。最後に、父が母をなだめるようにわらった。

「まあ、遠いところへ行くわけでもないんだからな。好きなようにさせてやろう。」
こうして、久之助は善助の養子になった。
善助は、それほど豊かではなかった。しかし善助もおかみさんも、いっしょうけんめい働いて、久之助をだいじに育てた。
二年ほどたったとき、おかみさんが病気でなくなった。久之助の母は、久之助を実家へつれもどそうとした。
「でも、それじゃ、お父がひとりっきりになってしまって、かわいそうだよ。」
久之助はそういって、帰ろうとしなかった。
すると十歳になったとき、その善助も病気にかかって死んでしまった。久之助は、そのあともひとりで住むといってがんばった。
あるとき、実家の母が死んだ善助の家に行ってみた。久之助はかまどでご飯をたいていた。母がかまのふたを取ってみると、ぶつぶつとあわを立てているのはヒエとアワばかりである。米つぶは一つぶもなかった。
母は思わず目をとがらせた。
「毎日、こんなものを食べていたの？」
「うん、そうだよ。」

「それで、おかずは？」
「塩だよ。塩をかけて食べるんだよ。」
「ばっ、ばかっ。」
とつぜん大声にしかりつけたかと思うと、母はみるみる目に涙をうかべた。
「ほんとに、なんておかしな子なんだろう。さあ、おいでっ。こんどこそ、つれて帰るからね。こんなことをしていると、死んでしまうよ。」
母は久之助の手を取ると、引きずるようにつれ出した。久之助は、しかたなく実家にもどった。
久之助は、また元のように、砂浜の上に絵をかいて遊んだ。前よりも、うまくなったとほめられた。
母が、おかしな子といったように、久之助には、子どものころから、こうと思いこんだらそれに心をうちこんでしまうような強情なところがあった。しかしまだ本気になって、
（大きくなったら、なにになろうか？）
ということを考えたことはなかった。

2　わき立つ雲

人は、何歳ごろから、自分の将来の夢を見はじめるのだろう？　それは、人によってまちまちである。

ほんの子どものうちから、自分の進む道をきめている人もいるし、おとなになっても、まだそれをきめかねて、まごまごしている人もいる。

また、夢をいだいているからといって、かならずそれを実らせるような道に進めるとはかぎらない。人は、生まれてきた時代や社会の状況によって、その生き方を大きく左右される。

久之助は、文政六年（一八二三年）に生まれた。江戸時代が終わりに近づいたころである。

江戸時代は、世の中の制度ががっちりとかたまった、きゅうくつな時代であった。

江戸（現在の東京）に幕府がおかれて、代々の徳川家の将軍が全国をおさめていた。

将軍の下には、大名がいる。将軍は、大名に領地を与えた。それが藩である。大名は、将軍につかえながら、一方で自分の藩をおさめていた。

士農工商の身分制度もはっきりきめられていた。さむらいの子は、さむらいになる。農家の子は、農民になる。自由はなかった。かってに、ちがった身分職業の人間になることなど、ふつうは許されなかった。

（大きくなったら、なにかべつのものになりたい。）

そういう夢など、もってのほかである。

久之助が生まれたところは、伊豆半島の南の方にある下田という港町である。

伊豆半島は、箱根の山があるあたりからツクシの頭のようにぴょこんととび出した、山また山の半島である。山が海岸までせまっているため、大きな港が少なかった。

下田は、その伊豆半島にあるいちばん大きな港である。港はふかい入り江になっていて、その南がわに、まるで自然の防波堤のような岬がつき出していた。おかげで、風から守られている。

江戸へ行く船も、西の方へ行く船も、よく下田に立ちよった。そのため幕府は、船を取り調べるための御用所を下田においていた。

久之助の家は、もともと、船の積み荷を買い集めたり店に売りさばいたりする問屋をしていた。しかし下田の問屋は、そのほかにもだいじな仕事をもっていた。御用所の役人を手つだって、下田に来る船を取りしまったり調べたりする仕事である。

久之助の父の桜田与惣右衛門も、その役目をおおせつかっていた。そのため、とくに大小の刀をさすことを許されていた。刀をさせても、身分はやはり商人である。

父は、御用所の仕事で、伊豆半島の北東の方にある三浦半島の浦賀にもしょっちゅう出かけた。一度出かけると、一か月もるすにしていた。

家にいるとき、ま夜中に御用所から呼び出されることもあった。

「沖合いで難破した船がある。至急、きてくれ。」

あわただしく身じたくをして、海べりにある御用所にかけつける。船頭を集めて、助けの船を出す。

やがて夜が明けるころ、沈みかけていた船の人たちを乗せて帰る。船とともに沈んでしまった積み荷を調べて、役人に報告書をさし出す。

善助の家から実家にもどってきた久之助は、父のしている仕事がだんだんとわかってきた。世の中のためになるりっぱな仕事である。自分でもやってみたいと思った。

しかし、家の仕事は長男がつぐものときめられている。次男や三男は、大きくなると、家を出てほかの仕事につくのがふつうである。

（おいらは、なにになるんだろうか？）

久之助は、ぼんやりと考えた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com